

幼稚園教諭養成の新設「領域に関する専門的事項」のカリキュラム開発 —理論と実践による領域横断的探究—

◎水崎 誠（東京学芸大学教育学講座幼児教育学分野）

○平野 麻衣子（東京学芸大学教育学講座幼児教育学分野）

小森 伸一（東京学芸大学健康・スポーツ科学講座体育学分野）

原 健二（東京学芸大学教職大学院）

澤田 康德（東京学芸大学人文科学講座地理学分野）

前田 優（東京学芸大学基礎自然科学講座分子化学分野）

南浦 涼介（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座日本語教育学分野）

吉富 友恭（東京学芸大学環境教育研究センター）

小林 大作（東京学芸大学音楽・演劇講座音楽分野）

石崎 秀和（東京学芸大学音楽・演劇講座音楽分野）

相田 隆司（東京学芸大学美術・書道講座美術科教育学分野）

朝野 浩行（東京学芸大学美術・書道講座美術分野）

中村 和弘（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座国語科教育学分野）

山田 有希子（代表）（東京学芸大学附属幼稚園）

代表者連絡先：mizusaki@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 幼稚園教諭養成，領域に関する専門的事項，カリキュラム

1 はじめに

平成 28 年 11 月に教育職員免許法施行規則の一部改正がおこなわれ，幼稚園教諭養成課程については，「領域に関する専門的事項」の単位取得が新たに求められるようになり，本学では令和 5 年度カリキュラムから実施される。この専門的事項は，「領域について，領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする」（保育教諭養成課程研究会，2017，p.8）と説明はあるが，コアカリキュラムはない。したがって，「領域に関する専門的事項」に関しては，各養成校の特色をいかした質の高いカリキュラムを作ることが求められている。本学には，各領域の専門家が多数存在して，また附属幼稚園が併設されている豊かな環境がある。この特色をいかして，本研究では幼稚園教諭養成の新設「領域に関する専門的事項」のカリキュラム開発をおこなうことを目的とする。

本学での「領域に関する専門的事項」は，「幼児と〇〇」という科目名であり，〇〇には各領域名が入り，1 単位 100 分で 7 週による授業である。これらのうち今回は，本研究の大学メンバーが担当する「幼児と環境 (b)」「幼児と言葉 (b)」「幼児と表現 A (b)」「幼児と表現 B (b)」を取り上げて研究をすすめる。なお，「科目名 (b)」は，幼児教育コース以外の学生が受講する科目であり，表現 A は主として音楽表現から，表現 B は主として造形表現から，領域「表現」について学習する科目である。

本研究では，第 1 に，「領域に関する専門的事項」を既に開始している国立大学のシラバスを分析し，現状を把握する。第 2 に，「領域に関する専門的事項」に関する学生及び附属幼稚園教諭を対象とした学習ニーズアンケート調査をおこなう。これらの結果をもとに考察していく。

2 本プロジェクトの実施

(1)「領域に関する専門的事項」のシラバス調査

2021 年度に「領域に関する専門的事項」（領域「環境」「言葉」「表現」）のシラバスを Web でアップしている国立大学（10 大学）を対象とした。10 大学のうち、「領域に関する専門的事項」について、本学と同様に 1 単位構成が 6 大学、2 単位構成が 4 大学であった。今回は、より多いサンプルを収集する理由から 2 単位のシラバスも分析に含めた。なお領域「表現」について、本学のように 2 科目で構成（音楽表現、造形表現）されている大学は 4 大学であった。収集したシラバスについて、「幼児」の視点が含まれているかどうかを分析の軸とした。その結果、各大学におけるシラバスからは、おおむね「幼児」の視点を踏まえた内容で構成されていることが明らかになった。「環境」「言葉」「表現」の各領域それぞれについての学問的な背景や考え方を示しながらも、そこに幼児の発達や遊び等についての関連が言及されていた。しかしながら、分析シラバスの中には「幼児」の視点をほとんど含めていないものもあり、このような傾向は、特に領域「表現」を主に音楽表現からアプローチする場合にみられた。

たとえば A 大学では、「鍵盤楽器における伴奏技術の習得」を目的として、全授業回をコードネーム伴奏の実技演習にあてている。特にピアノ初心者にとって、コードネーム伴奏は実践的に有意義であることは認められるが、幼児の歌唱・音楽表現との関連についての言及はない。B 大学では、「幼児の〈表現〉活動を指導・支援するための基礎的知識や技能を身につける」を目的として、ピアノ独奏（『バイエル』や『ブルグミュラー』など）、弾き歌い、和音伴奏の内容を示している。この内容からは、ピアノに関する基礎的知識や技能を幅広く身に付けることは理解できるが、それが幼児の〈表現〉活動を指導・支援することにどのようにつながるのかの言及はない。これら 2 つの内容からは、「幼児」の表現というよりも、「幼稚園教諭」としての表現技術に特化されていることが分かる。これが「領域に関する専門的事項」で求められる内容として十分なのかは疑問が残る。

(2)「領域に関する専門的事項」に関する学習ニーズアンケート調査

「領域に関する専門的事項」については、保育教諭養成課程研究会（2017）が作成したモデルカリキュラムがあり、それを参考にして各養成校が創意工夫している現状がある。この理由により、今回は当該研究会が示すモデルカリキュラムを用いて研究をすすめる。ここで示された内容は、いずれもすべて重要であるが、限られた授業時間（1 単位）を考慮した場合、本学の学生にとって特に重要とする事項を考慮して展開することが必要であると考え。そこで本研究では、「領域に関する専門的事項」に関する学生及び附属幼稚園教諭を対象とした学習ニーズアンケート調査をおこなった（令和 3 年 10 月実施）。

アンケート対象の学生は、幼稚園教諭免許を取得予定の 3 年生 46 人であり、記入ミス 1 人を除いた 45 人を有効回答とした。その内訳は以下の通りであった。初等教育教員養成課程は、国語、数学、理科、音楽、美術、家庭、学校教育、学校心理、国際教育、ものづくり技術の各選修、中等教育教員養成課程は、国語、音楽、家庭の各専攻、そして特別支援教育教員養成課程の発達障害教育専攻であった。アンケート対象の附属幼稚園教諭は 8 人であり、すべて有効回答であった。

先のモデルカリキュラムで示された到達目標（環境は 8、言葉は 7、表現は 8 項目）に基づきアンケート項目を作成し、学習ニーズによる順位付けをしてもらった。具体的には、「新設科目『幼児と〇〇』では、領域『〇〇』の指導に関する専門的事項について学びます。授業内容としては、以下のような〇項目が挙げられます」と説明した後に、学生には「あなた自身の興味・関心の高い方から（ ）に〇～〇の数字を付してください」、附属幼稚園教諭には「本年度、『教育実地研究Ⅰ』で担当した実習生の様子を踏まえて、実習前に学んでいて欲しいことについて、重要度の高い方から（ ）に〇～〇の数字を付して下さい」とした。

各科目における学生と附属幼稚園教諭からの学習ニーズを表 1 に示す。この表では回答者からの素点の合計を示しており、小さい方が重要度は高い。表では学生の素点の低い順（つまり重要度の高い順）に各項目を並べ、それに対応した附属幼稚園教諭の結果を示した。学生と附属幼稚園教諭からの回答は、ほぼ同様の傾向にあった。すなわち、「幼児と環境」では「幼児を取り巻く環境の諸側面（物的環境、人的環境、安全等）」と、幼児の発達におけるそれらの重要性、「幼児と言葉」では「言葉の楽しさや美しさに気付き、言葉を豊かにする実践を、幼児の発達の姿と合わせて」、「幼児と表現」では「幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感すること」が上位であった。各領域そのものの項目（たとえば「言葉の楽しさや美しさ」や「表現を生成する過程」）よりも、「幼児」の視点を入れた項目で学習ニーズが高かった。

表 1 「領域に関する専門的事項」に関する学生と附属幼稚園教諭からの学習ニーズ
(学生 45 人、附属幼稚園教諭 8 人の素点合計)

「幼児と環境」の項目	学生	附属
幼児を取り巻く環境の諸側面（物的環境、人的環境、安全等）と、幼児の発達におけるそれらの重要性	116	9
乳幼児期の認知的発達の特徴と筋道	170	29
幼児と環境との関わり方を捉える専門的概念（能動性、好奇心、探究心、有能感等）	187	20
乳幼児の生物、自然との関わり方の事象に対する興味・関心、理解の発達	190	32
乳幼児を取り巻く標識・文字等の環境と、それらへの興味・関心、それらとの関わり方	223	44
乳幼児の生活に関係が深い情報・施設と、それらへの興味・関心、それらとの関わり方	225	64
乳幼児の物理的、数量・図形との関わり方の事象に対する興味・関心、理解の発達	231	43
知識基盤社会及び持続可能な開発のための教育（ESD）などの幼児を取り巻く環境の現代的課題	275	47
「幼児と言葉」の項目	学生	附属
言葉の楽しさや美しさに気付き、言葉を豊かにする実践を、幼児の発達の姿と合わせて	122	25
言葉遊びなどの言葉の感覚を豊かにする実践について、基礎的な知識	143	27
乳幼児の言葉の発達過程について、言葉の機能への気付きも含めて	152	19
児童文化財（絵本・物語・紙芝居等）について、基礎的な知識	165	28
幼児の発達における児童文化財の意義	217	39
人間にとっての話し言葉や書き言葉などの言葉の意義と機能	229	46
言葉の楽しさや美しさ	232	40
「幼児と表現」の項目	学生	附属
幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感すること	165	25
様々な表現を感じる・みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすること	166	30
表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析すること	180	30
協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現につなげていくこと	191	43
身の周りのものを身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現	194	29
様々な表現の基礎的な知識技能を生かし、幼児の表現活動に展開させること	202	27
表現を生成する過程	233	51
幼児の遊びや生活における領域「表現」の位置付け	289	53

注) 学生 45 人のうち 1 人は、「幼児と環境」で同順位（3 位を 3 項目）を付けていたが、サンプル数確保の理由から、今回の対象に含めている。

3 成果と課題

本研究では、幼稚園教諭養成の新設「領域に関する専門的事項」のカリキュラム開発をおこなうことを目的として、領域「環境」「言葉」「表現」に関する科目を取り上げて検討した。領域に関する専門的事項では、「領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶこと」が基本とされている。今回対象とした3つの領域では、それぞれで必要とされる学習内容は違う。しかしながら、いずれにおいても、当該領域に「幼児」の視点を入れて、その関連性を重視して捉えていくような、カリキュラム開発の基本原則が、本研究の結果から示されたと考える。このように「幼児」との関連性をカリキュラムにおいて重視することは、今回のシラバス分析調査からも示されたように主流ではある。しかしながら、本研究ではそれを学生及び附属幼稚園教諭の学習ニーズをもとに根拠をもって示したところに大きな成果があると言える。

本研究の今後の課題としては、各授業の担当教員が「幼児」の視点をもって授業を出来るようにすることである。その際、重要なのは、広く一般的に「幼児」を捉えるよりもむしろ、幼稚園で環境を通して遊び・生活する「幼児」について、授業担当者がより良く理解することである。この点に関して、本研究大学メンバーは、附属幼稚園への保育参観（事後の話し合いを含む）を既に4回（小金井園舎は令和4年6月23、27日、7月8日、竹早園舎は10月12日）、実施しており、理解を深めているところである。このような参観を継続しながら、令和5年度カリキュラムの授業実施に向けて準備を進めていきたい。

引用・参考文献

- 保育教諭養成課程研究会（2017）『平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—』報告書。
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館。
- 無藤隆（代表）・保育教諭養成課程研究会（編）（2017）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか—モデルカリキュラムに基づく提案—』萌文書林。

付記

本研究では、各専門分野の見地から「領域に関する専門的事項」に関する学問的知見を報告書別冊にまとめて、東京学芸大学リポジトリで公開した。目次・執筆者は以下の通りである。この中には、附属幼稚園との連携による研究成果（環境での吉富、造形での朝野）も含んでいる。

「特別開発研究プロジェクト」報告書別冊の目次	執筆者
外遊びが幼児の十全な成長を促し「生きる力」を育む—幼稚園教育要領をふまえて—	小森伸一
幼稚園教諭養成教育における「領域に関する専門的事項」の趣旨を踏まえた飼育栽培活動の提案	原健二
幼児をとりまく現代の気候環境—日本有数の夏期暑熱地域熊谷市を中心に—	澤田康德
砂場遊びにおける幼児の体験と小学校の学習とのつながり—水の性質を利用した遊びの紹介とともに—	前田優
境界線のゆらぎという「グローバル」をふまえた幼児期の教育—「内」と「外」を切りわけない視点を実践と教師教育にもたせる—	南浦涼介
農園における幼児の自然物の収集に関する実践—環境教育研究センター教材植物園をフィールドとして—	吉富友恭
感性と表現に関する領域「表現」のこれまでとこれから—『幼稚園教育要領』の分析を通して—	水崎誠
幼児教育における「表現」歌唱指導に関する一提案—楽しむことに主眼を置いて—	小林大作
幼児教育と表現のかかわり—歌の「イメージ」から表現へ—	石崎秀和
幼児期における造形表現活動に関する一考察—幼児が“自分なりに表現する”ことをめぐって—	相田隆司
幼児教育における表現領域教材の考察	朝野浩行
幼稚園教育における言葉の学びのあり方に関する考察—領域「言葉」の内容を踏まえて—	中村和弘